

サンド信仰民俗考

白 庚勝*

はじめに

1994年9月10日から10月2日にかけて、筆者は中国西南民俗調査団が雲南省麗江納西族自治県内で行った納西族民俗調査に参加し、サンド信仰について、白沙郷玉龍村で楊作慎・楊汝魁の両氏から聞き取り調査を行った。調査団が昆明に戻った後、筆者は麗江に残り、麗江黒龍潭公園内に設けられた雲南省社会科学院東巴文化研究所において、和玉才・和即貴の両東巴から聞き取りを行った。この二つの聞き取りの結果を以下に報告し、サンド信仰についての認識を深めたい。

1, 調査期間

- (1)1994年9月19日
- (2)1994年10月3～5日

2, 調査地点

- (1)雲南省麗江県白沙郷玉龍村のサンド廟。玉龍山の麓に位置し、県城から30キロ離れている。
- (2)雲南省麗江県黒龍潭公園内の雲南省社会科学院東巴文化研究所。

3, 調査対象

- (1)楊作慎, 81歳, 男, 農民, 白沙郷玉龍村人, 漢文・東巴文が少し判り, かつてサンド廟の「達玉」(神職管理人)を長期にわたり務める。
楊汝魁, 70歳, 男, 農民, 白沙郷玉龍村人, かつて玉龍村生産隊長を長期間務め, 現在サンド廟管理員。
- (2)和玉才, 85歳, 男, 著名な東巴。麗江県大東郷哉丹村人。1984年より雲南社会科学院東巴文化研究所において東巴文化の翻訳・研究を指導している。
和即貴, 74歳, 男, 著名な東巴。麗江県鳴音郷鳴音村人。1984年より, 雲南社会科学院東巴文化研究所において東巴文化の翻訳・研究を指導している。

第一章 サンドその人

サンドは納西族の保護神であり、民族全体からの崇拝を集めているが、しかしその属する民族、姿などは今まで諸説あってはっきりせず、今回の調査でもまた様々な異説が見つかった。

1. 属する民族

- ①白族説：和玉才・和即貴両先生は、サンドは白族であると考え。というのも、東巴経の『三

*中国社会科学院少数民族文学研究所副研究員

多頌』は納西象形文字で白語を記した經典で、末尾に納西語の祝詞が幾つかつけ加えてあるに過ぎないからである。もしサンドが納西族であるなら、白語でその事跡を記録し、その加護を求めたりはしない。和玉才先生はまた、サンドを三多廟まで背負ってきた^{アブカテ}阿布高氏神の名は白語で、「お爺さん座ってください」という意味で、*aɿ pəɿ kvɿ tɿ*の音訳だという。有名な白族女性学者の徐琳氏は和玉才先生が『三多頌』を読むのを聞いて、經典の中に記されているのは古白語で音が変わっているが、幾つかの語句は現代の白語と共通しており、例えば經文中の*mər-ɿ |a-ɿ piɿ mi-ɿ*というのは「馬を飼うための塩と飼料」の意味である、と語ったことがある。

- ②納西族説：楊作慎・楊汝魁の両老人は、サンドは納西族であり、サンドの姓は楊、その母の姓は沙であるという。しかし彼らもサンドと白族に一定の関係があることは否定せず、例えばサンドには二人の妻がおり、一人は納西族で、もう一人は白族であるという。さらに、白族でサンドを信ずる者は納西族よりもはるかに多く、彼らは農曆二月八に祭りを行うだけでなく、八月にも祭りを行う。こんちでは、納西族の参拝客はすでに非常に少なくなっているが、白族の参拝客は増えこそすれ減ることはなく、その多くは鶴慶県から来ている。
- ③チベット族説：サンドを白族とする説を紹介した後、和玉才先生はさらに彼が幼少時に村の老人から聞いた話を付け加えた。それは、サンドは阿布高愁に背負われてチベットのラサから玉龍山の麓にやってきたというものである。彼を下ろしてしまうともう背負うことができず、人々はここにサンド廟を建てたという。これはサンドがチベット族だと直接言っているわけではないが、そこにチベット族出身という意味が全く含まれていないというのでもない。ラサはずっとチベット族の政治・経済・文化の中心であり、チベット仏教の聖地でもあった。サンドをチベット族とする説は、納西族地区、とりわけチベット族と隣り合っている塔城・魯甸等に広く伝わっている。和開祥先生の紹介によると、魯甸等での祭りで読まれるサンドの經典にはかなりのチベット語が混ざっているという⁽¹⁾。

2, 様相

- ①神石説：和即貴先生の紹介によると、彼はかつて玉龍村の老人の話を聞いたが、サンドを背負った阿布高氏は牧人であったという。ある日、彼は獵犬を連れて玉龍山の麓へヤギの群を放牧しに行き、獵犬が一頭の白鹿を雪山の虚庚岩⁽²⁾まで追いかけると白い石になってしまったのを見た。彼は不思議に思い、白石を背負って山の下まで降りてきた。不思議なことに、この神石は初め非常に軽かったのが、その後次第に重くなり、三多閣村まで来ると、彼は疲れて白石を下ろして休まねばならなくなった。もう一度背負おうとすると、石は山のように重く、二度と動かさなかった。人々はそこでこの石を雪山の精霊であると考え、石の上に廟を建ててこれをまつり、廟をサンド廟と名付けた。こうした伝説は民間に広く伝わっており、細かい部分が少々違っているに過ぎない。
- ②神仏説：和玉才先生はサンドはラサから背負われてきた^{ブラオ}「普勞」すなわち神仏であり、神石でも人間でもないという。

③人間説：これまで紹介してきたものの他に、楊作慎・楊汝魁両老人はサンドは本来人であり、彼には母も妻もあり、姓も名もあり、生まれ年もあるが、後に精霊になったのだという。しかし、彼は木氏土司の將軍でも、明代に木氏土司に仕えていた奴隷でもなく、二人の老人はみなそんなことは聞いたことがないという。この二つの説はかつて一部の納西族知識人の間で非常に広まっていたものである。

3、容姿

サンドの容姿の表現については、あまり違いはなく、みなサンドは白衣白鎧を身に着け、白馬に乗り、風とともに現れて雲とともに去り、麗江一帶の安全を守るだけでなく、異郷に住む納西族女性の一人一人をも守ると述べている。

第二章 サンドの靈驗

サンドは廟に奉られる精霊であるだけでなく、納西族の「生活」を治めており、苦難や軍が乱れる度に靈驗を表した。時間的特徴を見ると、それは遙か昔だけでなく、今世紀の四十年代にまである。今回の調査ではサンドの靈驗に関する話を五件収集した。

1、サンドが劉興武を退ける。

今世紀の四十年代に、匪賊劉興武の率いる兵が麗江を襲わんとし、すでに城の西方30キロの拉市盆地にまで攻め入った。拉市盆地の指雲寺のラマは寺の中に隠れると、人を麗江盆地に遣って知らせようとした。劉興武がこの計画を知り、兵を率いて黄山の峰を越えようとしたところ、突然サンドが数千の神兵や神將騎馬を率いて天から舞い降り、匪賊はびっくりして逃げ去った。(楊作慎口述)

2、サンドが靈驗を現し保安軍を打ち破る。

解放前夜、国民党保安軍の羅指令が麗江を占拠して共産党と戦おうと企んだ。羅指令は大研鎮人の楊書烈の息子に案内を命じ、麗江を攻め落としたり彼を県長にしてやると言った。しかし、サンドが靈驗を現し、麗江の軍民は羅指令の保安軍を打ち破り、楊書烈の息子も捕まり、獄につなされた。(和玉才口述)

3、サンドが靈驗を現して遊撃隊を助け、負けを転じて勝利とする。

解放前夜、和法宝⁽³⁾率いる遊撃隊は保安団と戦い、敗れてしまった。和法宝は遊撃隊を率いてサンド廟にやってきてサンド神を拜んだ。すると、サンドが靈驗を現し、遊撃隊が劍川でかなりの保安団兵を倒すのを助けた。サンドの加護により、麗江は平和裡に解放され、鶴慶・劍川・永勝・維西・中甸のように武力で解放しなくても済んだ。(和玉才口述)

4、サンドの兵がチベット族の匪賊を退ける。

今世紀最初の甲子の年、一群のチベット族匪賊が麗江の大具を襲った。大具の財物を奪い尽くし、焼き尽くした後、匪賊は玉龍山に沿って南下し、麗江城を襲おうと企んだ。しかし匪賊が干海子に来ると、突然白馬と黒馬で編成される二つの隊伍が白沙の上空から次々現れ、チベット匪賊はびっくりしてほうほうの体で逃げ出し、金沙江を渡ってチベットへ逃げ帰った。この二つの

騎兵隊はサンド神の軍隊である。(和即貴口述)

5, 和国柱がサンド神の加護を受ける。

サンド廟の中には今でも『和国柱撰捐三多廟田碑文』というのがあり、この乾隆年間生まれの納西族将領はかつて「土兵」(納西族の軍隊)を率いて九龍江へ討伐に行き、サンド神の加護を受けて凱旋したという事跡が記述されている。当時の軍兵はみなサンド神は「長眉円目」で、「獸を率いて營に巡らし」、匪賊が軍に紛れるのを許さず、「土兵を守」るのを見たという。「多くの発見者が、みな北岳が靈驗を現すことを知っており、国柱は」ゆえに、將軍は帰ってくると、田地をサンド廟に捐じ、加護を与えてもらった恩にこたえた。この碑は乾隆十三年に立てられている。

第三章 サンドの神系

納西族の神靈系統の中で、サンドは自ら体系をなしており、外来の尊神系統には属さず、また元からあった主神系統にも属さない。楊作慎・楊汝魁老人の紹介によると、サンド神系には以下の神靈が含まれる。

- 1, サンドの母：姓は沙で、その民族、事跡についてはいずれも何も伝えられていない。
- 2, サンドの妻：二人おり、そのうち一人を納西族、もう一人を白族とする。ある人はまた一人をチベット族、もう一人を白族とする。考察されるべき事跡はない。
- 3, アブカティ高氏：力持ちの神とされ、サンドは彼に背負われて玉龍山の麓にやってきたのであるが、他に事跡はない。
- 4, ツェバナタン次巴納湯：サンドの召使いであるが、考察すべき事跡はない。全部で二人いる。
- 5, カンシ肯失將軍：サンドの部将であるが、考察すべき事跡はない。全部で四人いる。
- 6, 十武士：彼らは馬に乗って隊を率い、随時サンドの指令を待っている。
- 7, 七衛士：彼らはサンド及びその妻の身边を護衛し、一步も離れない。
- 8, 十二戦馬：そのうち六頭は黒色で、六頭は白色であり、十武士の後にぴったり付いている。

これらの神靈・神畜は、いずれも白沙の三多廟の中に像が造られてある。具体的には、サンドの母は後殿に造られ、サンドは正殿に造られ、二人の妻は左右両側にそれぞれ造られ、阿布高愁は神棚に安置され、正殿の西北の角に懸けられている。八衛士は東西四人ずつに分かれて正殿の壁の前に並んでおり、肯失將軍は東西二人ずつ正殿のベランダに並んでいる。次巴納湯は東西に一人ずつ肯失將軍の前にいる。十武士は十天干を象徴し、東西五人ずつに分かれて門樓の通路の両側に並んでいる。十二頭の戦馬は十二地支を象徴しており、東西六頭ずつに分かれて十武士の後ろにいる。馬の色は東が白、西が黒で、陰陽を象徴している。

和玉才先生の紹介によると、大東郷魯納吾古村の三多廟には、サンドとその妻、阿布高氏、馬王、白馬一頭の塑像があるだけで、サンドの神系が麗江白沙の三多廟に較べてかなり簡単であることを示している。

第四章 サンドの祭祀場所

サンドを祭る場所としては、大体廟、壇、庭院等の三種がある。そのうち廟はさらに総廟と分廟の二種類に分かれ、壇も固定的な祭壇と臨時の祭壇の二種類に分かれる。

1, 廟

①総廟：玉龍山の南の麓白沙郷玉龍村にあり、毎年二月八には、麗江一帶の納西族・白族民衆がここでサンド祭りを挙げる。毎年八月には、麗江及び鶴慶の白族がまたここでサンド祭りを挙げる。

②分廟：白沙のサンド廟から比較的遠いところにある地方では、その地のサンド廟が建てられ、二月八及び平時の祭祀に供される。比較的有名な分廟には団山拓東村のサンド廟（山神廟ともいう）、大具玉龍山東麓のサンド廟、大東魯納吾古村のサンド廟、魯甸阿詩祖村のサンド廟等々がある。これらの分廟で行われる祭りは規模が白沙に較べて小さく、内容も比較的簡単である。

2, 壇

大東郷哉丹村には、村の後ろに二つの三多壇があり、一つはもっぱら二月八にサンドを祭る際に用い、祠が建てられている。もう一つの祭壇は家畜が増えぬためにサンドを祭る際に用いられ、土地を平らにならして石を幾つか積んで目印にしているだけである。この壇は山神を祭ったり汚れを除く儀式を行う際にも用いられる。六月二十一の「余色厄節」にサンドを祭る壇は、その頃ヤギの群が高山の牧場にいることから、牧人の宿泊するところに臨時に設けられる。

鳴音郷鳴音村では、壇に塔が一つ建てられ、毎年二月八の集団でのサンド祭りはここで挙行され、固定のものと臨時のものとの区別はない。

3, 庭院

例えば子供に名前を付けたり、春節に祭りを挙げる際には、庭院の中に臨時に壇を設けて挙げる。

第五章 サンドの祭儀

以上に紹介したサンドの祭祀場所と関連して、サンドの祭儀も総祭・村祭・野祭・族祭・家祭という数種の形式に分けられる。そのうち、総祭はさらに官祭と民祭の二種類に分けられ、村祭・野祭及び族祭も「余色厄節」祭と二月八祭の二種類に分けられる。家祭は命名祭、家畜の安全を希求する祭、祖先神仏を供養する祭の三種の形式に分けられる。

1, 総祭

時期は二月八である。場所は白沙玉龍村サンド廟である。参加者は主に麗江盆地及び近隣地区の納西族と白族の官民である。目的は一年の健康無事、五穀豊穡、家畜繁栄などを祈ることにある。参加者は数万人にも達する。

①官祭：木氏土司は雍正二年以降通判となり、地位は千丈に落ちたが、そのサンド祭儀は依然民祭と区別された。楊作慎老人の紹介によると、木氏の官祭は二日間にわたり、農曆二月の最初の馬の日に、サンド廟の達玉は城へ行って木老爺を迎えて祭りを挙げる。彼

が轎に乗せられてサンド廟の門の所に来ると、廟の中で最も年長の達玉は木老爺が轎から下りるのを手伝い、サンド廟に招き入れる。第一院と第二院の間の建物を通る際、達玉は「麒麟堂」と呼ばれる真ん中の部屋の正門を開け、木老爺が門を通ればまた閉めねばならず、「御門」の意味が非常に強くなっている。一般人が出入りするにはこの門の両側に回らねばならない。

しばし休憩した後、生け贄を捧げる儀式を行わねばならない。正殿のベランダにテーブルを一つ設け、傍らに椅子を一つ置き、木老爺がそこに座って供え物を出す。供え物には果実、菓子、大金鏝、大銀鏝〔旧時通貨として用いられた金塊及び銀塊一訳者註〕、紅蠟燭、油灯、香蠟燭、生の鶏肉が含まれ、テーブルの前には生きた豚、ヤギが置かれる。供え物が揃った後、達玉によりヨモギの枝でテーブル上の碗に入った畜乳にちょっと浸すが、これは木老爺に付いてきた木氏の親属の嘴と眼につけるためである。

供え物を盛りつけた後、供え物を全て正殿内のサンドの像の前に運んで跪き、達玉に『三多頌』を読んでもらう。

その晩、木氏はサンド廟の中に泊まるが、布団や炊事器具、飲食品はみな自分で城内から持ってきたものである。

二日目は羊の日であり、早朝、木老爺は熟祭行い、供え物を並べて神像の前で跪くのは前日と同じであるが、肉の供え物だけはみなすでに煮てある。祭が終わると、達玉は木老爺一行を廟から城まで送る。廟では、達玉が二つの庭院の間の建物の「麒麟堂」（真ん中の部屋）の門を開けて木老爺を通す。その後、またそれをしっかり閉めるのである。

ここで、二点説明しておかねばならない。一つは、祭品の中の豚と鶏は達玉である楊作慎の家が提供し、その見返りに楊作慎の家では「祭鶏祭猪地」と呼ばれる七畝の土地を耕作することができる。祭羊は玉湖村が提供するが、これは玉湖村の人が木老爺の所有する玉龍山の牧場でヤギを放牧している報酬だという。第二に、ある人は木老爺はサンドの神像の前で跪かず、椅子に座って祭りをを行うのだといい、それをさらに進めてこれはサンドが木老爺の祖先である木氏土司の部将だった故であるという。これは間違いである。それはこの解釈者が木老爺が椅子に座って供え物を並べる場面しか見ていないことに原因がある。

- ②民祭：民祭はまた二日にわたり、二月最初の馬の日に、参拝客は村・里を単位として白沙三多廟の中に入り、木老爺が生祭を行った後、また村・里を単位として生祭を行う。しかし、供え物を並べるという内容は挿入する必要がない。参拝客は性別や年齢を問わない。儀式はやはり達玉の主催で行われ、テーブルの上に碗一杯の水を置き、その中に柏の枝を差し入れる。跪いた後、達玉は彼らのために三多経を読む。この仕事はずっと楊作慎が担当してきた。第二日目、参拝客たちは熟祭を挙行し、肉の供え物に火を通すほかは、生祭と同じである。くじ引きなどを行った後、参拝客は余った香・蠟燭・鏝等を達玉に保管してもらい、毎日代わりに燃やして捧げてもらう。達玉はこれらの香・蠟燭などを受け取る際に参拝客のために『存香経』を読む。香や蠟燭などを残し、参拝客は帰る。

2、村祭

鳴音郷鳴音村では、サンド祭は村落を単位に行われ、期間は毎年の農曆二月八で、場所は村の高台の宝塔の下のサンド神壇である。具体的な状況については、和即貴先生もすでに詳述できない。

大東郷哉丹村は全部で三十六世帯あり、サンド神を祭る儀式は特定の東巴が担当する。この儀式では、東巴は法衣を着る必要がない。毎年二月八に、村全体が廟の建物の中の祭壇に集まってサンドを祭る。供え物は鶏一羽、ヤギ一頭、塩、小麦、乳扇、色を付けた粉皮、胡麻が幾らかである。そのうち、塩と小麦はサンドの戦馬に献ずる飼料であり、胡麻は祭祀を終えた後に香炉に入れてパチパチ鳴らせる。儀式は「サンドを招く」「福を求める」「サンドを送る」という三つの過程に基づき行われ、祭をつかさどる東巴は象形文字で書かれた『三多頌経』を読む。人々は絶えずサンドに向かって跪拝する。祭が終わると、村人は酒は祭を行う数カ月前に各世帯が穀物一斗を供出し、合わせて三十六斗の穀物で醸成したものである。

3、族祭

同じく大東郷哉丹村では、一部の宗族が正月初一にサンドを祭るが、祭るのはサンドだけではなく、さらに山神、祖先なども含まれる。和玉才先生の宗族は正月初一にサンドを祭らないので、その状況については不詳である。

4、野祭

毎年六月二十一日は「余色厄節」であるが、大東郷哉丹村ではヤギはすべて人に預けて高山牧場の放牧用の家屋にいる、この日はみな高山牧場に行って「余色厄節」を祝い、サンド神と山神と一緒に祭る。供え物には鶏一羽を用いる。祭儀は特定の東巴によって執り行われる。平時サンドを祭る際、人々は真北を向かねばならないが、この日は南の白沙サンド廟の方を向かねばならない。人々は跪き、東巴は『三多頌経』を読む。祭が終わると、ヤギ飼いとヤギの持ち主は一緒に食事をする。飲食品は、各ヤギの持ち主が村から持ってくる。ある人はヤギを飼っておらず、またサンドを祭る壇も村はずれの祭壇ではないので、この祭を村祭としない。

5、家祭

哉丹村では家祭は正月初一祭、命名祭、家畜の繁栄を祈る祭の三種の形式に分ける。参加者は家庭の構成員だけである。正月初一祭のほかは、いずれも東巴に執り行ってもらい、『三多頌経』を読んでもらう。

- ①正月初一祭：正月初一の早朝、汚れを清める火を焚いた後、庭の中にテーブルを一つ置き、各種の菓子をお供え、サンド、山神、祖先及びその他の神霊を呼び寄せ、彼らに新年の平安と幸福を祈る。家中の人が家長に続いて、北方に向かって絶えず叩頭する。香・蠟燭・蠟などと一緒にテーブルの上に置く。
- ②命名祭：妊婦が出産した後、東巴に頼んで幼児の命名をしてもらう。東巴は産婦の家の庭にテーブルを置き、塩及び小麦（大麦を用いることもある）をお供え、香を焚き、まず汚れを除き、サンド神に降臨してもらう。それから、東巴は産婦の生辰の八字及び嬰兒の誕生時の時

辰に基づき、それが巴格図のどの方位にあるかを測る。一般には、東方は「呂伯久納^{ルボチユナ}」と呼び、西方は「呂伯佳孜拉^{ルボジャスラ}」, 南方は「呂伯吉当^{ルボジダン}」, 北方は「牛負牛芝^{ニウフニウジ}」, 牛の方角は「呂伯構土^{ルボコウトツ}」, 龍の方角は「諾布^{ヌオブ}」, 狗の方角は「肯貢^{ケンゴン}」, 羊の方角は「呂伯余瑪^{ルボユマ}」と呼ぶ。実は、これらの名前の中から嬰兒と関連ある音の一つだけ取り、さらに彼（彼女）自身の属する音を加え、最後にその性別を表す「若^{スオ}」(男)または「命^{ミン}」(女)という音を加え、名前とする。しかし今世紀の三、四十年代には戛丹村では漢語名だけをつけるようになり、命名サンド祭はすでに廃れている。この儀式は主にサンドが出生者の一生の健康と幸運を加護するよう祈るものである。

- ③家畜の繁栄を祈る祭：時期は一定していないが、一般には家の家畜が病気にかかったり、野獣に咬まれてけがをした後に東巴に頼んで行うもので、祭を行う場所として村の裏にこうした儀式を専門に行う祭壇がある。祭壇は村の公有であり、どの家でも事あれば使うことができる。読み上げる経典及び供え物、式次第はいずれもその他のサンド祭と同じであり、その目的はサンドが家畜の繁栄を見守り、疾病や野獣の災いを除いてくれるよう祈ることにある。

第六章 サンド祭経

サンドの祭儀に用いられる経典には三種類あり、それらはいずれも東巴文字を用いて書かれている。その中で『存香経』及び『祭三多経』は白沙サンド廟の官祭と民祭の儀式でのみ読まれ、祭祀を主催する特定の達玉のみが掌握している。かつてこの仕事を専門的に担当した楊作慎老人の話によると、この二種類の経の前半部分は白語・チベット語・リス語等の混合体であり、後半部分は納西語である。『三多頌経』は長さが比較的長く、例えば和玉才先生が読んだのは百四十三行の長さになつた。和玉才先生は、最後の十行余りの祝詞が納西語であるのを除くと、その他はいずれも純粋な白族語であり、自分は読むことはできるが、その意味は判らないと言う。この経書は、ほとんどの東巴が読むことができ、各東巴がそれぞれ一冊ずつ持っているようであるが、地域性がかなり現れており、白族に隣接している地区では白語の成分がより多く、一方チベット族に隣接する地区では、かなりのチベット語が混じっている。しかも、一つの地区であっても、東巴が異なる儀式によって即興である部分を付け加えたりする。ここでは楊作慎老人の口誦による『存香経』及び『祭三多経』である。

(一) 『存香経』

- ① tʃi- tʃ'aɣ ~ a- pɯŋ ka- ti- ,
- ② tʃi- tʃ'ɔɣ dʒərɣ to- ,
- ③ tʃi- tʃ'ɔɣ dʒər- mu- ,
- ④ to- sɛ- dʒər- to- ,
- ⑤ to- sɛ- dʒər- mu- ,
- ⑥ to- dʒər- mu- fi- fi- zə- ,
- ⑦ fi- zə- mi- ɰ- fi- zə- kv- ɰ- ,

- ⑧ fi- tɕɕ- pɪ- kux- ,
 ⑨ mi- tsɪ- tɕɕ- gə- ,
 ⑩ ho- pmi- tsɪ- kə- ,
 ⑪ fi- tsɪ- tso- mə- ,
 ⑫ ho- pmi- tsɪ- kə- ,
 ⑬ fi- tsɪ- tso- mə- ,
 ⑭ hə- tɕɕ- dɕ- tɕɕ- ,
 ⑮ tsɪ- tɕɕ- dɕ- tɕɕ- ,
 ⑯ ji- gu- dɕ- hu- dɕ- gv- ,
 ⑰ a- ri- ku- na- ho- ,
 ⑱ pi- na- ti- jy- let- dər- ,
 ⑲ x li- x ts'un-
 ⑳ dɕ- kv- sɪ- fi- tɕ'ua- ts'ər- ha- ,
 ㉑ fy- zi- sɪ- fi- tɕ'ua- ts'ər- ly- ,
 ㉒ dɕ- so- dɕ- ly- gə- let- dɕɕ- ,
 ㉓ dɕɕ- pə- let- ts'ɪ- tɕ'ɪ- ,
 ㉔ ts'ɪ- pa- na- t'ɕ- nu- ,
 ㉕ le- jy- pə- jə- nu- ,
 ㉖ a- pv- ka- ti- nu-
 ㉗ le- jy- pə- jə- nu-
 ㉘ sui- tɕɕ- pə- jo- kə- (le- pu-)
 ㉙ ji- da- tɕ'ɪ- dɕi- gə-
 ㉚ ha- ly- dɕi- mi- ,
 ㉛ lv- bv- lv- me- ,
 ㉜ ts'ɪ- sɕ- sɕ- ji- ,
 ㉝ gu- la- ka- jə- ho- ,
 ㉞ hu- hu- fi- fi- ,
 ㉟ dɕ- o- lv- dɕ- ka- le- :

この経文中では①から⑱までが白語で、⑲から㉟までが納西語である。そのうち、⑱は漢語の借用で、「とても楽しい」という意味である。

(二) 『祭三多経』(「fv- tv- tɕɕ- tɕiə-」)

- ① sɪ- ho- pa- ho- sɪ- tɕ- ho- ,
 ② sɪ- dze- sɪ- do- dze- hu- ,
 ③ hu- ha- dze- sɪ- ,

- ④ kuæ-tji-tfæ7 lo7 s2-t,
- ⑤ mu-t kv-t ta7 tfæ7 s2-t,
- ⑥ pi-t po7 ta7 hæ-t s2-t,
- ⑦ pi-t po7 lo7 hæ-t s2-t,
- ⑧ lo7 hæ-t mi-t na-t s2-t,
- ⑨ jy7 ly-t pv7 ku-t s2-t,
- ⑩ po-t tse-t to-t tse-t,
- ⑪ bv-t dze7 ts2-t tse-t tse-t dze-t s2-t,
- ⑫ dze-t hu7 dze-t npi7,
- ⑬ s2-t to-t — ho-t,
- ⑭ gu7 tʂ'27 gu7 tʂ'æ-t,
- ⑮ næ7 to-t tʂi-t tʂæ-t,
- ⑯ tʂi7 tʂ'æ-t pæ-t tæ-t,
- ⑰ tse-t lo7 ka-t tʂ27 tʂi-t,
- ⑱ tʂ27 o-t s27 dza-t kæ-t,
- ⑲ kæ7 tʂ2-t tʂi-t tʂe7 kæ7 z2-t ku-t ji-t,
- ⑳ ti-t ji-t z27 ji-t s27 ji-t ku7 ts2-t ji-t,
- ㉑ to-t fu-t ho7 sæ-t ji-t,
- ㉒ tse7 kv-t tse7 ʂo7 ji-t,
- ㉓ so-t ʂuo7 ly-t ty-t ji-t,
- ㉔ dæ7 la-t k'm-t tʂ'2-t ji-t,
- ㉕ bv-t dze7 o7 gu-t ji-t,
- ㉖ ji-t ts'2-t to-t fu-t ji-t,
- ㉗ so7 hæ-t to-t ts'27 ji-t,
- ㉘ ji-t ts'27 huæ-t tʂ2-t ji-t,
- ㉙ tʂi7 tʂi-t pv-t dze7 tʂ2-t ji-t,
- ㉚ næ7 lo7 pæ-t mi-t,
- ㉛ o7 mbæ7 tʂ27 mi-t,
- ㉜ hæ7 tʂi-t z2-t tʂi-t,
- ㉝ ts27 tʂi-t ts'o7 tʂ'i-t,
- ㉞ k'v7 me-t tʂi-t me-t,
- ㉟ ji-t ta7 dv-t tʂ'i-t,
- ㊱ v-t z2-t v-t liæ7 npi7,
- ㊲ ua-t ti-t jy7 le-t dæ-t,
- ㊳ li7 tʂiæ-t ʂiæ7 x li-t x ts'un-t x tʂiæ-t nut —

- ③⑨ fv7tv-ɣsu7 tsɿ1,
 ④⑩ sue7 sue7 ts'æ7 ts'æ7,
 ④① huæ-ɣ huæ-ɣ ɣi-ɣ ɣi-ɣ.
 ④② dɯ-ɣ ɣv-ɣ ɣpɿə-ɣ ho7:

この経文の中で他の民族の言語（主に白語）が占める割合はかなり大きく、①から③⑦までがみなそうである。③⑧から④②までがわずかに納西語で、そのうち③⑧番目の句の前半部分は漢語からの借用であり、「ある里ある村ある家」という意味である。④⑩、④①番目の句はいずれも漢語の借用で、「とても順調」「とても嬉しい」という意味である。楊作慎老人の話では、彼は十八才の時に上記の二つの経文の暗唱を学び始めたが、納西語ではないため、なかなか暗唱できず、数え切れない儀式をこなしてようやく流暢に暗唱できるようになったが、今でもその意味が判らないと言う。なおここで説明しておきたいのは、(二)の『祭三多経』は納西語では「^{フトウシユチ}負篤碩久」fv7tv-ɣsu7tɿəと呼ばれ、「祈福経」という意味である。ここで「祭三多経」と訳したのは、これと東巴經典中の「祈福経」と混同しないようにするためである。

第七章 白沙サンド廟

白沙サンド廟はサンド神の本拠地であり、納西族のサンド信仰における聖地でもある。廟の建築規模が大きく、管理体制が整い、サンドの神系が整い、祭祀儀式が複雑多様で、参拝者が最も多い、等がその顕著な特徴である。ここで、筆者は白沙サンド廟の配置及び管理体制について紹介する。

1, 配置

白沙サンド廟は玉龍山南麓の玉龍村にあり、北を上手として南を向いており、中にはいると二つの院があり、両院の間は五部屋ある平屋の建物で仕切られており、その真ん中の部屋は麒麟堂と呼ばれ、第一院から第二院へ進む際の通り道となっている。昔は麒麟堂には門があって、平時は閉め切れ、二月八に木老爺が祭祀に来たときのみ開いて出入りし、一般の参拝客はこの門の両側に回らねばならなかった。

1, 第一院の真東には三部屋で二階建ての建物があり、鐘楼と呼ばれる。むかし、二階には大きな銅鐘が吊るされ、一階は大研鎮からの参拝客の二月八のサンド祭の際の宿泊所となっていた。その反対側には、かつて三部屋二階建ての建物があり、鼓楼と呼ばれた。ここも二階には太鼓が一つ置かれ、一階は大研鎮の参拝客の宿泊所であった。しかしこの建物は文化大革命の時に壊れてしまった。こんにち、第一院の南端の中央には大門が建てられ、大門と東側の建物の間には高い壁が築かれ、大門と本来鼓楼のあった部分の間もまた高い壁が築かれている。寺廟を保護するために、鼓楼が壊された跡にもすでに高い壁が築かれている。楊汝魁老人の紹介によると、大門のあるところは本来南北に向いた二階建て五部屋の門楼があったという。一階の真ん中が大門として用いられていた。その左右にはそれぞれ兵馬が並び、兵は全部で十体でそれぞれ五体ずつ、

馬は全部で十二体でそれぞれ六体ずつである上、六体は黒色、もう六体は白色で、人が前で馬が後ろという状態になっている。鼓楼と門楼の間の角地には、本来二部屋の小屋があり、香火を保管するのに用いられたが、百年余りに火事で焼けてしまった。

2、第二院は正殿、東廂、西廂、鼎亭の四つの部分に分かれる。東西の廂はそれぞれ五部屋あり、現在は何もないが、かつては鍋や竈が置かれ、参拝客が飯を炊いたり供え物を制作するのに用いられた。どの地域の参拝客がどの部屋の鍋竈を使うかは一般的に比較的固定しており、勝手に換えたりはできない。正殿は三多廟の建築分の中心部分であり、南北向きに建っており、平屋で三部屋しかないが、楼房よりも高く、五部屋分より広い。修復を経て、現在では大殿の正堂には大きな神座が設けられ、サンド神が中央にあり、彼の両側には二人の妻が左右に分かれて座っている。西側の壁に寄ったところに、阿布高氏の像が造られている。阿布高氏はマントをはおい、頭にはフェルト帽を被っている。これと反対側の東側の壁の前には一体の武官の像が造られ、人々は「肯失將軍」と呼んでいる。しかし、五十年代より前には、正殿の中は全く別の光景が広がっていたのであり、神霊が多かっただけでなく、その位置も現在とは違っていた。具体的に言うと、サンド及びその妻の像は今と同じであるが、阿布高氏の神像は神棚に置かれ、西北角の壁面に懸けられていた。八体の部将は二手に分かれて東と西の壁のところに並び、そこには手すりがあった。正殿のベランダには六体の神が置かれ、そのうち四体は「肯失將軍」と呼ばれ、二体ずつ殿堂とベランダの間の東西の壁の所に立っていた。残りの二体は「次巴納湯」と呼ばれ、東西に分かれて「肯失將軍」の前に並んでいた。つまり、正殿には全部で十八体の神像が造られていたことになる。

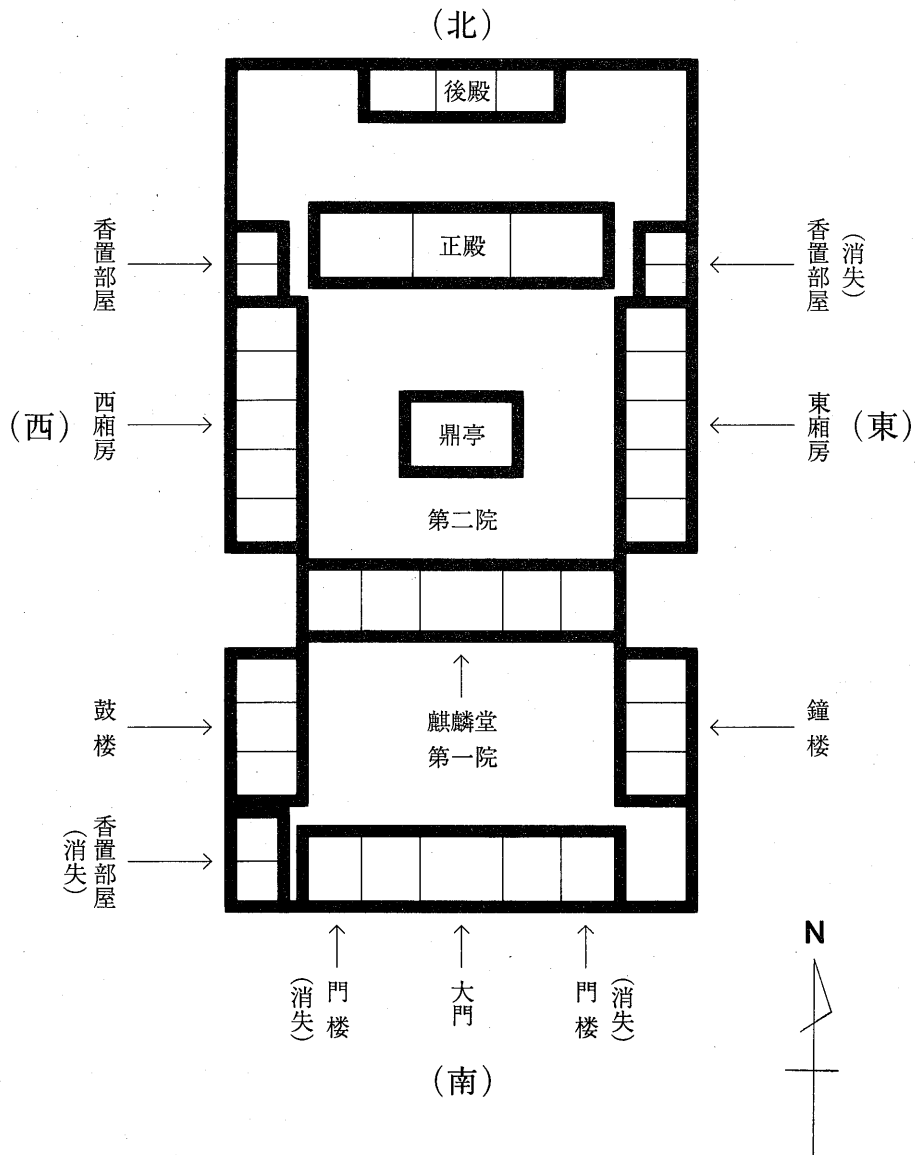
第二院の庭の中心には鼎亭が建てられており、鼎は高さ2メートル、直径約1.5メートルで、香を焚くのに用いられる。

第二院の付属的部分として、東廂と正殿東側の間の角には、本来二部屋の平屋が建てられていたが、現在は壊されてしまっている。西廂と正殿西側の間の角には、現在でも二部屋の平屋があり、元々は香や蠟燭を置くのに用いていたが、現在は管理人が生活するのに用いている。

3、正殿の背後には後殿があり、かつてはサンドの母親の像があった。現在はすでに空っぽで、神像はとくに壊されていた。

構造全体を見てみると、建築、神像を問わず、その配置は対称をなしており、陰陽の調和や天と地の対応を重視しており、北側を尊しとし、母子夫妻の人倫を重視しており、明らかに漢文化の特徴を持っている。

4, 白沙サンド廟のイメージ図



2, 管理

白沙サンド廟には、管理委員会のような組織がないわけではなく、その管理は主に管理人である達玉の責任、権利、伝承及びその構成などによって体现されている。以下にその管理状況を詳述する。

1, 名称

白沙サンド廟の管理人は「達玉」(daljy) と呼ばれるが、その語源及び意味はいずれもはっきりせず、白語あるいはチベット語であるとされている。

2, 伝承

達玉の職は祖先伝来であり、いずれも男性である。楊作慎老人の話では、その家系の中では彼は三代目の「達玉」であるという。それ以前は「達玉」の職がなく、村に廟を一つだけ設けてまつり、「本近」 be-ɪtɕi7 村の和という姓の家が担当していたが、約百年して「達玉」がこれを管理するよう改めたという。

3, 構成

達玉は玉龍村の三世帯の家族が担当し、一つは楊作慎の家、もう一つは楊汝魁の堂祖父である楊発金の家、もう一つは趙という姓の家である。

4, 具体的な仕事分担

楊発金はずっと廟に住んでおり、三多廟の一切の管理を請け負っており、サンド廟の建物財産の安全、明かりの点灯、毎日の焼香、参拝客の接待、各地への資金集めなども含まれている。その他の両家は毎年二月八及び八月（主に白族）の大祭時に臨時で楊発金のサンド廟の管理を手伝うだけである。そのうち、楊作慎は十八才の時父を継いで達玉となり二月八及び八月の大祭の時に『存香経』と『祭三多経』の朗読を担当し、参拝客のために籤を占った。その家の親族は楊発金及び趙家の家族と一緒に大祭の前に必要な薪を集めてこなければならない。参拝客は麗江盆地、拉市、七河及び鶴慶等各地からやってくるため、三人の達玉の間には一定の仕事分担があり、一人が幾つかの地方の参拝客の祭儀を担当する。

5, 共同責任

A. 木老爺一族の送迎、及びその祭儀の主催、B. 大祭のための薪集め、C. サンド廟の建物の補修、D. 大祭期間中の各種サービス、秩序維持、E. サンド廟に関連する一切の事務の共同決定。

6, 経済収入

三人の達玉はサンド廟で作業分担したり協力したりするため、共同の収入があるだけでなく、個別的な収入もあり、同じと言うわけではない。

共同収入には以下の幾つかが挙げられる。A. 大祭の後で参拝客が納める薪代、鍋竈の器具使用代、B. 大祭の日に参拝客が払う功德銭、C. 大祭の日に参拝客が籤引き占いをする際に払う費用、D. 大祭の日に参拝客が奉納する塩、蚕豆、油、米、小麦粉などの物品、E. 大祭の日に祭祀の度に送られる豚のほお肉や鶏足。これらの共同収入は、一部を廟の事務の維持のために残しておく以外は、均等に分配する。

個別収入：A. 楊発金は日常的に廟に住んでおり、収入が最も豊かで、その来源は大体以下のものである：①平時の参拝客が奉納する銭、物、食糧など、②平時の参拝客が廟で食事したり宿泊する際の費用、③麗江及び鶴慶の各地で募金をして得た金、④大祭の日に趙氏と楊作慎家の両家と均分した銭、食糧、物。B. 楊作慎家の収入は：①籤を占う際にもらう金品、②木氏が祭を行うために提供した祭猪及祭鶏種廟地 畝で、祭鶏や祭猪の飼料を除くと、残りの穀物は全部自分のものとなる、③大祭の日にその他の両家と均分して得た銭、食糧、物。C. 趙氏の収入は：①種廟地三畝で得た全ての収入、②その他の両家と大祭の日に均分して得た銭、食糧、物。比較してみると、廟守である楊発金が最も富んでおり、彼の住居には油缶、米、小麦粉、豚肉、鶏のもも肉で満ちている。

付記

サンド信仰は納西族社会の間で非常に盛んである。サンド信仰の研究についてはすでに半世紀余りの歴史があるが、本格的なフィールドワークが欠けていたため、今日に至るもまだ重要な成果を上げていない。今回の調査ではサンド信仰、とりわけ白沙サンド廟を中心とするサンド祭について比較的全体的な理解を得ることができたが、様々な原因により、不十分な感じもかなり残った。今後、以下の幾つかの面でさらなる調査研究を行わねばならない。

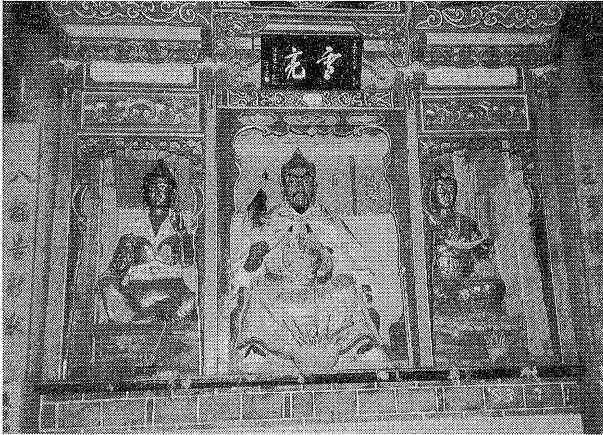
- 一、調査対象を鶴慶及び麗江各地の白族社会にまで広め、彼らのサンド信仰の状況を調べ、彼らに本文で述べた二つの経典及び和玉才先生が読む『三多頌経』を分析してもらう。
- 二、納西族の巫術師である「桑尼」とサンド信仰の間の関係をさらに調査し、サンド神が東巴教から遊離し尊神および主神系統が存在するに至った原因を調べる。
- 三、実地調査と文献分析を通じて、サンド信仰とチベット文化の間の関係を調べる。
- 四、サンド廟の詳細な概念図を作成し、白沙サンド廟と各地のサンド廟の間の関係を調べる。
- 五、サンド祭の期間の経済、民間文芸、社交などの状況をさらに調べる。
- 六、達玉の経済収入などについて定量分析を行う。
- 七、木氏土司（木老爺）とサンド祭の間の関係をもっと調べる。
- 八、三多廟の管理制度を詳細に調査する。

総じて言うと、以上の考察は、今後の研究のための基礎を定めたに過ぎない。

最後に、九月十九日に筆者とともに白沙サンド廟で楊作慎、楊汝魁の両老人から聞き取り調査を行ったのが、調査団メンバーの陶立璠教授、李子賢教授、丸山宏助教授、巴莫阿依講師、李錫館長、楊志堅助理館員であること、また雲南社会科学院東巴文化研究所での聞き取りでは、当研究所の副所長和継孫先生の全面的な協力を得たことを特に記しておく。

註

- (1) これは和開祥先生が1993年に筆者に語ったものである。
- (2) 地名。玉龍雪山の溪谷にある。
- (3) 納西族の領袖で、40年に西南聯合大学で学び、その後共産党の地下組織に参加し、麗江に戻って革命工作を展開した。解放後は麗江県党委員会書記に就任する。現在は雲南省民族事務委員会顧問。
(翻訳 上野稔弘)



白沙サンド廟

上，“サンド神と二人の妻”
左，“肯失將軍”像
右，“阿布高氏”像

